

# オーストラリアン・ダンス・シアター 『HELD』

『HELD』は写真、時間、そして現実の知覚に関するダンス・パフォーマンスである。  
ゲアリー・スチュワートの振付による激しい動きと、写真家ロイス・グリーンフィールドによる  
静止画が、ダイナミックな緊張感を生み出し、重さ／軽さ、静止／流動、  
透明／幻影の行き来の中で目をみはるライブ・パフォーマンスが展開される。

『HELD』は無垢で、不遜で、粗野で、優美で、詩的で、パンクで、  
今で、ポスト終末的で、クールにそっけなく、セクシー極まりない。  
これはとてつもないアートだ。(アレックス・ホイットン dBマガジン)



©Lois Greenfield

## オーストラリアン・ダンス・シアター (ADT) 『HELD』

【日時】 9月30日(土) 19:00 開演  
10月1日(日) 16:00 開演

【会場】 彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【演目】 『HELD』

【振付】 ゲアリー・スチュワート

【出演】 オーストラリアン・ダンス・シアター  
ロイス・グリーンフィールド(写真家)

【チケット(税込)】 一般 S席 5,000円 A席 3,000円 学生 A席 2,000円  
メンバーズ S席 4,500円 A席 2,700円

【発売日】メンバーズ 6月3日(土) 一般 6月10日(土)

### オーストラリアン・ダンス・シアター Australian Dance Theatre

1965年にアデレードで設立された。オーストラリアで最も影響力のあるカンパニーのひとつ。40年の歴史の中で幅広いスタイルと様々なディレクターを受け入れてきたが、舞踊家たちには新しい表現を、観客には新しい体験を与えることにおいて常に他をリードしてきた。1999年のゲアリー・スチュワートの芸術監督への就任以降、そのスタイルは、速く、攻撃的で、緊張感に満ちたものに根本的に変化した。ダンサーはクラシック・バレエやコンテンポラリー・ダンスのテクニクにはじまり、体操、ブレイクダンス、武道などのトレーニングも幅広く受け、他に比すべきものがないユニークなダンスを展開している。

### ゲアリー・スチュワート (ADT芸術監督・振付家) Garry Stewart

メルボルンのオーストラリアン・バレエ学校にて訓練を受け、ADT、クイーンズランド・バレエ、ワン・エキストラ・カンパニーなどでダンサーとして活躍した後、振付家としての活動を始める。フリーの振付家として、オーストラリアの主要な現代舞踊団、チャンキーマーズやシドニー・ダンス・カンパニー等で作品を創作する。1999年にADTの芸術監督に任命される。以降、『Birdbrain』、『Plastic Space』、『Monstrosity』、2002年度のオーストラリアン・ダンス・アワードにて振付部門を含む3つの賞を同時受賞した『The Age of Unbeauty』など、話題作を発表し続けている。



…ダンサーたちを、天井知らずに舞い上がるかのような飛行中に捉え、  
またグループ倒立といった不可能な体位で凍結する画像が圧巻。  
常に大胆不敵で本能的で危険すれすれのスチュワートの振付は、  
この新作でダンサーたちを更に命取りぎりぎりに追い詰める。  
さあ、エンジンをブルブル鳴らして見に行こう。(キャサリン・グッド アトタイザー紙)

## 疑わしきダンスの見方

たとえば、バレエは飛翔浮揚への憧憬が、そのもっとも象徴的な動きのモチーフだといわれる。ダンサーはより高く飛翔し、より長く浮遊することを目指す。けれども人間は自力で、ものの5秒も空中にとどまることが誰一人できない。ダンサーはみんなあざやかにこの不可避の絶望を知っているが、実に華麗に跳び続け、落下し続ける。60年代後半に起ったポストモダンダンスの一群に、ステファニー・エバニツキーがいる。彼女はジャドソンチャーチの内部にロープを張りめぐらし、ダンサーたちはその上部からロープをつたって、ゆっくりと落下し続けるダンスを発想した。そこにはすでに飛翔への憧憬はなく、ひたすら落下していくダンサーという物体があるのみなのだ。H・アールカオスの大島早紀子は、ダンサーをロープに吊るることによって、拋物線上に回遊することを開発した。そして、ADTのゲアリー・スチュワートは、写真家をステージに上げることによって、跳び続け、回転し続けるダンサーを見事に静止させてしまった。

しかしカメラが舞台上に持ち込まれ設置されて、ダンスとライブ映像あるいは写真が、協奏するように展示展開されることは今までに何度もあった。厚木凡人も、ルチンダ・チャイルドも、フィリッ

プ・ドゥクフレも、伊藤キムも、多くのコレオグラファーがチャレンジしている。しかしここで明らかな違いは、ロイス・グリーンフィールドという女性写真家を起用していることだろう。初期のララ・ヒューマン・ステップスの格闘技ダンスを髣髴とさせる、それよりもっとマッチョで、ダンスアスリートなADTのダンスを、ロイスが切り取る。それは客観的な記録装置ではなく、私以外のもう一人の観客がいて、しかもダンスの最も近い位置から、ダンスグラフィックを提出し続ける。私たちは舞台を見ているとき、意識の中で自動的に場面をクローズアップしたり、ワイドに見たりしている。けれどもこれだけダンスの内部に入り込み、ムーブメントというより肉体としてダンサーを見た経験がない。『HELD』は、切り取られた「静止」を提示することで、私たちが普段何気なくダンスを見ている「観る」という行為が快楽を疑わしめると同時に、新しいダンスの楽しみ方を教えてくれる。

榎本了巻

榎本了巻(えのもとりょうまち)

東京生まれ。武蔵野美術大学造形学部卒業。クリエイティブ・ディレクター、プロデューサー。株式会社アタマテ・インターナショナル代表。日本文化デザインフォーラム幹事。日本ダンスフォーラムボードメンバー。全国税理士共済会文化財団理事。「東京コンペ」プロデューサー。京都造形芸術大学教授・情報デザイン学科長。71年寺山修司監督作品「書を捨てよ町へ出よう」美術担当。天井穂数ヨーロッパ公演美術監督。74年月刊「ピクチャーハウス」を萩原朝美と創刊。以降、編集、出版、文化イベント、TV番組制作等の仕事を展開する。06年カルチャーメッセ・サイト「コムコム.com」www.komu-komu.comを配信開始。